HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	万葉集巻八・一五六二～一五六三歌をめぐる問題
著者	小野寺，静子；ONODERA，Seiko
引用	北海学園大学人文論集(52)：130(一）-119（十二）
発行日	2012-07-30

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

万葉集巻八・一五六二～一五六三歌をめぐる問題

小野寺　静子

一　問題提起と一五六二～一五六三歌の本文について

巫部麻蘇娘子の雁がねの歌一首

誰聞きつ　こゆ鳴き渡る　雁がねの　妻呼ぶ声の　ともしくもあるを　（八・一五六二）

大伴家持の和ふる歌一首

聞きつやと　妹が問はせる　雁がねは　まことも遠く　雲隠るなり　（八・一五六三）[1]

これら二首は近年においては通常次のように訳される。今、その一例として全注の口語訳を掲げる。

どなたかお聞きになりましたか。ここを鳴いて飛んでゆく雁の、妻を呼び求める声は何とも羨ましいことですよ（一五六二）。

聞きましたかと、あなたがお尋ねになった雁の鳴き声は、お言葉どおりほんとに遠く雲の彼方で鳴いているようです（一五六三）。

全注は、「雑歌に入っているが、この両首は、次の一五六四・一五六五とともに相聞歌と見てよいもの」とし、「雁がねの妻呼ぶ声」は自分（作者）に声もかけてくれない相手の男にあてこすりを言うため、空を渡る雁を持ち出したものか。

と一五六二歌の「ともしくもあるか」の「ともし」を羨ましいの意と解釈する。

（一）

「ともし」には乏しいの意もあるが、ここはどう解釈すべきなのか、ひいてはこの歌をどう考えるべきなのかが問題であり、以下、このことについて考えていく。

まず、二首の本文についてみていく。塙本・本文では一五六二歌の本文を、

誰聞都　従二此間一鳴渡　鴈鳴乃　嬬呼音乃　乏知在乎

としている。結句の「乏知在乎」はこのように書写されたものがあるわけではない。『校本万葉集』（以下、校本と省略）、『校本万葉集　新増補』（以下、新増補と省略）により諸本の異動をたどると、[2]一句から四句までは神田本に「此間」が草書体のような文字となっている以外、特に本文の異同はないといってよい。校本によれば、類聚古集、神田本、西本願寺本、細井本、温故堂本、活字無訓本、京大本に「寸」を「守」とし、新増補版によれば春日本、神宮文庫本も「寸」を「守」とする。したがって、書写本では「之知左寸」ないしは「之知左守」となっていることが認められる。

結句の訓みは、諸本の多くが「ユクヲシラサス」であるが、校本によれば類聚古集に「『かくれたくさる。』『たくさる』ノ右ニ墨『ルクソアル』アリ」とあるというから、「カクレルクソアル」と訓んでいることになる。神田本は「『カクシルクサル。』漢字ノ左ニ『ユクヲシラサス』あり」とあり、異訓を示すものの結局「ユクヲシラサス」と訓んでいる。京大本は「七字青。但赭ニテ消セリ。ソノ右ニ赭『カクシルクサル』アリ。漢字ノ左ニ赭『ユクヲモシラス コレヲシルサム』アリ。」とあるところから「カクシルクサル」と訓んでいることになるが、「ユクヲモシラス」「コレヲシルサム」の訓みも示していることになる。新増補では春日本に「カクシ□クサル」があるが、これは京大本と同じであろうか。これらによれば諸本で提示された訓みは「ユクヲシラサス」が大勢で、他に「カクレルクソアル」「カクシルクサル」「ユクヲモシラス」「コレヲシルサム」の訓みもされてきたということになり、結句の訓みは表記の不適さからか、さまざまな試みがなされ定訓をみるに至らなかったことになる。これ故に一五六二歌の結句の訓みと表記の考察は、注釈書によってなされることになる。

（二）

一五六三歌の校本の本文は、

聞津哉登　妹之問勢流　雁鳴者　真毛遠　雲隠奈利

で、訓みは「キヽツヤト　イモノトハセル　カリカ子ハ　マコトモトホクモ　クモカクルナリ」である。校本によると神田本に「雲」の文字がないくらいで本文の異同はほとんどない。訓みでは二句目が「いもかとひつる」（類聚古集）、「イモカトハセル」（神田本、西本願寺本、細井本、温故堂本―以上校本。春日本、神宮文庫本―新増補）、三句目が「カリカネモ」（春日本――新増補）、結句が「クモカクレナリ」（細井本――校本）の異同がある。いずれも助詞や敬語表現の有無の問題で、特に取り上げなければならないような異同でなく、塙本・本文の本文、塙本・訳文の訓みで問題はない。二首を通して本文、訓み、意味の上で問題となるのは、一五六二歌の結句である。

二　一五六二歌結句の本文と訓み

一五六二歌の結句の本文と訓みは、[3]

「之方知左寸」「ゆくへしらさす」　代精

「乏知左守」「ともしとしらさむ」　童・宗師案

「之知左乎」「このしるけさを」　童・愚案

「去方知左寸」「ゆくへしらさず」　考

「去方不令知」「ゆくへしらせず」『万葉集問目』[4]

「乏蜘在可」「ともしくもあるか」　略解所引宣長云、略解、新考、口訳、全釈、金子評釈、私注、大系、講談社文庫、全歌講義

「乏左右爾」「ともしきまでに」　古義、総釈

「乏蜘在寸」「ともしくもありき」　窪田評釈、

「乏蜘在寸」「ともしくもありき」　佐佐木評釈

「乏知在乎」「ともしくもあるを」　訂増全註釈、注釈、全集、新編全集、新大系

「乏知在乎」「ともしくもあるか」　和歌大系、全注、釈注

（原文は示さない）「ともしくもあるか」　集成、全解

で、私が見た限りでは以上のような本文と訓みが提示されている。

一五六二歌結句は江戸期以降、書写本の表記を誤字として斥け誤字説をとることによって訓みと解釈がなされ

（三）

ることになった。後世にもっとも影響を与えたのが略解があげる、「宣長云　乏蜘在可、と有しが誤れるならむ。ともしくもあるか、と訓むべし」という、宣長の考えである。以後この考えによるものが多く、近年のものでもこれに従うもの、根底にこれがあるものが殆どである。略解には宣長が何故「乏蜘在可」としたかについては触れていないが、「之」は「乏」、「知」は「蜘」、「左」は「在」、「寸（守）」は「可」の誤字とするもので、すべての文字を誤字とみなすことになる。

この「宣長云」は宣長の何という著書に書かれているのか明らかでない。宣長のこの歌に対する発言は『万葉集問目』に、

コノ結句、誤守(字)ハナキニヤ、次の和歌の心ことはをむかへ見るに、末は去方不令知(ユクヘシラセズ)てふ言なる事しるし、然れは之は去の誤にて、次に方(へ)の字落しならむ、……

とあり、本文「去方不令知」、訓み「ユクヘシラセズ」とすること、また『万葉集問聞抄』では門人田中道麿の、

下句不得解、

次手に活板の万葉に卒句の寸を守とす、凡て集中寸を須に用たるは、此歌の外になし、

という問に対し、

結句は、之方知左寸(ユクヘシラサス)と加茂翁いへり、されと結句は猶きこえす、寸は守を用ゆへし。(5)

と「寸は守を用ゆへし」以外、真淵の考えを示すのみで略解所引の「宣長云」に相当するものはなく、また書名に万葉集を冠する宣長の他の著書でもこの歌に対する発言は見られない。(6) これら以外の著書にある可能性もあるが、略解を著した橘千蔭と宣長は共に賀茂真淵の門下であり、千蔭は略解を書くにあたり宣長に疑問点を示し意見をもらっていたことや、略解が完成する頃には宣長は晩年にさしかかっていたことなどを考えると、「宣長云」は宣長から千蔭への書簡にあり、宣長自身は書き留めなかった可能性が高い。

結句の訓みは略解の発言以来、宣長の見解が取り上げられてきたが、結句を「ともし……」と訓み始めたのは荷田春満にさかのぼる。童蒙抄に、

宗師案には之の字は前の歌のなみもあれば、乏と云字の上の一点落たるなるべし。然らばともしと知ら

（四）

さんと読むべし。守の字をむとよむ義は、まもるの約はむ也。よりて守の字を書きてむと読ませたるなるべし。声の之をと云続は無きこと也。つゞき難き句続なれば、ともしと云字と見るべしと也。

とあって、宗師案として結句本文を「乏知左守」、訓みを「ともしとしらさむ」とする案が示されている。宗師とは荷田信名の兄荷田春満のことで、信名は童蒙抄の中に宗師案として春満の考えを載せている。春満は真淵の師であるから、宣長は自分の師の師にあたる春満の考えによって、「乏蜘在可、と有しが誤れるならむ。ともしくもあるか、と訓むべし」と千蔭に示した可能性がある。そう考えると、「之」を「乏」の誤とし「ともし」と訓むのは春満に始まることになる。

近年でも宣長説を採用する注釈書は見られるが、それらには宣長がどこでどのように述べているのかの検証はないまま、宣長説による、として採用している。最近ではそうした採用の仕方を是としないためか、無条件で宣長説に従うという注釈書は減ってきている傾向はあるが、略解が引く宣長の訓みに従う形で本文校訂がなされてきたことは事実である。が、最初に「之」は「乏」の誤りで「ともし」と訓むべきことを示した童蒙抄のこの「宗師案」こそ取り上げるべきであろう。

結句をどう訓むかは問題として残る。「乏」は「之」と書き間違いの起き易い文字で、現在「乏」として定着している次の例でも「之」の書写本があることが認められる。

……うまこり　あやに乏寸（ともしき）　高照らす　日の皇子
（二・一六二）

は神田本に、

うまこり　あやに乏敷（ともしき）　鳴る神の　音のみ聞きし
……　（六・九一三）

とある。細井本、活字無訓本で「乏」とある、

山遠き　都にしあれば　さ雄鹿の　妻呼ぶ声は
乏毛（ともしくも）あるか　（十・二一五一）

秋萩の　散り過ぎ行かば　さ雄鹿は　わび鳴きせむ
な　見ずは乏焉（ともしみ）　（十・二一五二）

は類聚古集で「之」になっている。また、

藤原の　大宮仕へ　生れつくや　娘子がともは　乏（ともし）

（五）

吉ろかも　（一・五三）

は、書写本に「之」とあるが、『万葉集玉の小琴別巻』で宣長が、

田中道麻呂云く、結句の之字は乏の誤り、……此考へよろし、……

と述べて以来「乏」が本文として認めらるようになっている。

こうした例を挙げるまでもなく、「之」と「乏」は書写にあたって間違いやすい文字であり、一首の意味がなさないとあれば誤字として認めるべきであろう。現代の解釈では、諸書写本が書きついできた「之知左寸」ないしは「之知左守」は本文としての姿を殆ど留めないことになるが、「之」は「乏」の誤字であると認め、この歌の二句以降は鳴き渡って行く雁の妻呼ぶ声が「乏」であることを歌っているのだということはいえる。

三　一五六二歌結句の意味

結句を「ともし……」と訓んで、どう解釈するか。「ともし」は、少ない、乏しいの意であり、そこから心が惹かれる、羨ましいの意が生ずる。この歌では意味の上から結句を乏しいとも羨ましいともとることができる。近年の注釈書は羨ましい、の意に解釈しそれが通説となっているといってよいが、こうした解釈は古くからあったわけではない。いったい何時ころからこうした解釈がなされるようになったのであろうか。

童蒙抄に宗師案として、

扨歌の意は乏とは声のかすかに遠く遥かなると云心にて、乏と読めるなれば、誰れか聞きつらん、鴈の妻よぶ声のこゝにはかすかにともしく聞ゆるが、そこにはいかにやと云義也。

とあり、「ともし」を「声のかすかに遠く遥かなる」と解釈している。略解所引の宣長の考えを「さることながら」として引きながら「ともしきまでに」の訓みを示した古義は、

鴈が音の、嬬呼こえはる〳〵きこえて、此間の空を鳴渡るが、感を催さるゝまでおもしろきを、誰か聞きつらむ、さだめて心ある君こそ、先聞給ふなるら

（六）

め、いかできかせ給へ、といひたるよしなり、さてこそ和歌に、聞津哉登云々とは、いはれたるなれと、やはり「はる〳〵」と聞こえるの意で、遠くで鳴いていることを「ともし」と解しているととれる。古義説をとる総釈が【口釈】で「妻を恋ひながら呼ぶ声が、珍らしく思はれるまでおもしろいのを」としているのは、訓みでは古義によるものの意味は変化してきている。これは古義の「感を催さるゝまでおもしろきを」という作歌動機に触れた部分を「ともし」の解釈としていることによると思われる。宣長説に従う全釈は「マコトニ佳イ声デスヨ」と訳し、新考でも「トモシの意は前の歌なると同じかるべし」即ち「メヅラシサの意なるべし」としている。宣長自身は結句の意味を示していないからどのように解釈したか不明であるが、新考、総釈あたりから「ともし」を珍しいの意に解釈するようになってきた。この傾向は口訳あたりまで続くが、その後これにかわったのが羨ましいという解釈で、窪田評釈にはじまり現代もっとも採用される解釈である。ただし、中には私注のように「淋しいことでありますよ」とする解釈もある。

羨ましい、という解釈をまず示した窪田評釈は、この歌は「季節の物としての雁の声のあはれさを親しい人に言ひやつて、同感を求めた」雑歌であるが、

しかし此の歌は、それに寄せて男女間の恨みを訴へてあつて、その方が主で、作意からいふと相聞の歌である。「誰聞きつ」と尋ねてゐるのは、「嬬呼ぶ声」であつて、娘子はそれを「ともし」と聞いて、それに対しての同感を求めてゐるのである。率直にいふと、家持に疎遠にされてゐることを嘆き、雁の如く嬬呼ぶ声を聞かせてもらひたいと云ふのである。

と、「男女間の恨みを訴え」るものと解釈する。窪田評釈が「ともし」を羨ましいと解釈するのは、一五六二歌が家持の許へ送り届けられ、その返歌として一五六三歌が巫部麻蘇娘子のもとへ送り届けられた、二首はいわゆる贈答の関係にある歌で、巫部麻蘇娘子に疎遠な家持に妻を思って鳴く雁の鳴声が羨ましい、とおくりやった歌とする。この考えが現代にまで引継がれ、通説となっている。

（七）

四　二首の関係

一五六三歌は「和歌」とある。万葉集では、

額田王下二近江国一時作歌井戸王即和歌（一・一七～一九題詞）

弓削皇子遊二吉野一時御歌一首（三・二四二）

春日王奉レ和歌一首（三・二四三）

大伴坂上郎女宴二親族一之日吟歌一首（三・四〇一）

大伴宿祢駿河麻呂即和歌一首（三・四〇二）

十一年己卯夏六月大伴宿祢家持悲二傷亡妾一作歌一首（三・四六二）

弟大伴宿祢書持即和歌一首（三・四六三）

とあるように（塙本・本文）、旅羇、宴などの場で歌われた歌に対して、その場を共有する者が即座に唱和した場合に「和歌」として用いられる傾向をみてとることができる。ただそれ以外にないかといえばそうはいえず、「贈答歌」の「答」に相当する意で用いられ、贈られてきた歌に対して贈り返す歌という意味で「和歌」としているものもある。また「追和歌」というのも追って和えた歌で同所・同時性はない。そういう用法もあるが、「和」は唱和としての義を第一義として用いられたと考えてよい。

しかし、万葉集全体を通してみた時、そう単純でもない。橋本四郎氏は万葉集の「報」と「和」の用法を比較し、「『和』の場合はもとの歌をあくまで主としつつ従の立場で添い合され、両者の関係は並行的である」[7]と述べたが、これに対し芳賀紀雄氏は中国文学の検討から、

「和」は、その時その場における唱和が、元来の形式だったことになろう。この唱和形式が、個人同士においてはもとより、やがては発展的に集団制作の場に持ち込まれ、かたわら、贈答の体裁をとるに到ったと概括しうる。

と述べている[8]。芳賀氏の考えによれば、一五六三歌の「和」はこの「集団制作の場に持ち込まれ」た唱和形式と考えてよいだろう。

「巫部麻蘇娘子の雁がねの歌一首」と「大伴家持の和ふる歌一首」は、家持をはじめ巫部麻蘇娘子らが集う宴の場で巫部麻蘇娘子の歌に家持が唱和した歌なのだろう。

巫部麻蘇娘子の「誰聞きつ」という問いかけに家持が誰よりも早く唱和した。「誰聞きつ」の問いかけは当然雁の鳴声に関しての問いかけである。巫部麻蘇娘子は宴席の賑わいの中で雁の妻を呼ぶ鳴声をかすかに聞いたから、「誰聞きつ」と問いかけた。「ともしくもあるを」は雁の鳴声がかすかであることを歌っているのである。「ともし」は少ない、乏しいの意ととってこそ、「誰聞きつ」という問いかけが生きてくる。これに対して家持は雁は雲にかくれ遠くにいることを歌って和える。

「雲隠る」は、文字通り雲に隠れ見えないの意であるが、挽歌で死の敬避表現として用いられたりする。次に示すように鳥の鳴声とともに歌われる歌は意外に多い。

老いたる身に病を重ね、年を経て辛苦み、また児等を思ふ歌

慰むる　心はなしに　雲隠り　鳴き行く鳥の　音のみし泣かゆ　（五・八九八、憶良）

大伴家持の秋の歌

ひさかたの　雨間も置かず　雲隠り　鳴きそ行くなる　早稲田雁がね　（八・一五六六、秋雑歌）

雲隠り　鳴くなる雁の　行きて居む　秋田の穂立繁くし思ほゆ　（八・一五六七、秋雑歌）

弓削皇子に献る歌

雲隠り　雁鳴く時は　秋山の　黄葉片待つ　時は過ぐれど　（九・一七〇三、人麻呂歌集、雑歌）

雁を詠む

秋風に　大和へ越ゆる　雁がねは　いや遠ざかる　雲隠りつつ　（十・二一二八、秋雑歌）

秋風に　山飛び越ゆる　雁がねの　声遠ざかる　雲隠るらし　（十・二一三六、秋雑歌）

鶴がねの　今朝鳴くなへに　雁がねは　いづくさしてか　雲隠るらむ　（十・二一三八、秋雑歌）

帰る雁を見る歌

燕来る　時にはなりぬと　雁がねは　国偲ひつつ　雲隠り鳴く　（十九・四一四四、家持）

憶良の歌は「鳥」とのみあるが他はすべて雲に隠れながら鳴くのは雁である。巻八、九、十の六首をはじめ巻十九の一首を含めて雑歌として収められるもので、雁が雲隠れながら鳴く情景は秋の風物として定着している。

（九）

巫部麻蘇娘子の問いかけに、家持は、聞きましたか、とあなたがお問いになった雁の声はまさしく遠い雲のかなたに隠れています、と唱和したもので、賑わう宴席でかすかな雁の鳴声を聞いた風流な人はいませんか、との問いかけに「まことも遠く」と和し風流士として名乗りを挙げたのである。

この二首は宴の喧騒の中でかすかな雁の鳴声を聞いた、自分と同じように風流な心を持っている人はいるか、という巫部麻蘇娘子の問いかけに家持が即座に和した歌であるからこそ、「相聞」でなく「雑歌」に収められているのである。

先に挙げた童蒙抄・宗師案の「誰れか聞きつらん、鴈の妻よぶ声のこゝにはかすかにともしく聞ゆる」、あるいは古義の、雁の鳴声が「はる〳〵きこえて、此間の空を鳴渡るが、感を催さるゝまでおもしろきを、誰か聞きつらむ、さだめて心ある君こそ、先聞給ふなるらめ、いかできかせ給へ、といひたるよしなり」がこの歌々の意味するところであろう。

（一〇）

五　二首は「雑歌」である

一五六二、一五六三歌は巫部麻蘇娘子と家持との恋の贈答歌というより宴席の場で披露された歌で、雁の鳴声に聞き入る風流（みやび）な歌のやりとりである。しかしこの二首は風流な歌にとどまるものではないだろう。

一五六二歌の「ともし」を羨ましいの意に解釈したのは窪田評釈に始まったわけだが、この二首に恋歌めかせた意味をもたせるには、窪田空穂のように解釈することによってである。巫部麻蘇娘子の歌を「率直にいふと、家持に疎遠にされてゐることを嘆き、雁の如く嬬呼ぶ声を聞かせてもらひたい」[9]、妻を呼ぶ鳴き声が羨ましい、と解釈し、恋歌めかした歌と解する。中西進氏も二首を贈答の歌と考えた上でのことだが、娘子の歌は「相手のいる雁と違って聞いてもくれない家持を求める自分にとって、『妻よぶ声』は羨しいのであ」り、それに対して家持は「遠く雲隠れて鳴く雁は、近く声高く鳴くのではない。あなたの恋心はその程度だというのである」と逆に相手をせめる手法の歌とし、「この和歌の呼吸はまことに見事

で、家持はけっして凡手ではない」と述べている。[10] 注釈書では、中西氏のように「あなたの恋心はその程度だというのである」ということまでいっていないが、家持の歌は巫部麻蘇娘子の歌の「ともし」の意でなく「乏し」の意にとりなしはぐらかすやりとりの面白さを歌うものとして二首を理解する。

男女の間でかわされた歌であるならば、こうした恋歌めかした要素が含まれていることは否定できないだろう。宴の席ともなれば、いっそうそうした要素が望まれよう。が、一五六二、一五六三歌の二首は「秋雑歌」中の歌である。二首を「秋雑歌」部に入れたのは家持自身である。「秋相聞」部に入れられなかった理由として「これらの女性との恋がもはや過去のものとなった時に、ほかならぬ家持が、詞書をそえて、『秋雑歌』にいれてしまった[11]」と考えるものもあるが、「秋雑歌」に入っているのは家持自身の意思によるもので、この二首が本質的に雑歌であるからだろう。よしんば二人の歌に相聞的な解釈ができたとしても、戯笑性をねらった、うけこたえの面白さを示すもので、二人の間に現実的な恋は認めがたい。二首は恋歌めかした要素を持ちつつ、

どなたかお聞きになりましたか。ここを鳴いて飛んでゆく雁の、妻を呼び求める声は何ともかすかでありますよ（一五六二）。

聞きましたかと、あなたがお尋ねになった雁の鳴き声は、ほんとに遠く雲の彼方で鳴いています（一五六三）。

と、「雁が音」という秋の景物を詠じた歌として「秋雑歌」部に収められた歌と考える。

注

（1）本文中の万葉集の歌・題詞などは塙書房『万葉集　訳文篇』『万葉集　本文篇』により、それぞれ塙本・訳文、塙本・本文と省略して記した。

（2）『校本万葉集　増補』にはこれら二首についての記事はない。

（3）訓みの表記は、カタカナ書きとひらかな書きがあるが、ひらかな書きに統一した。

（4）『本居宣長全集』六巻　128ページ　筑摩書房

（一一）

（5）注4に同じ。254ページ

（6）宣長の万葉集に関する発言は、上の二著を除いては『本居宣長全集』に、『万葉集重載歌及巻の次第』『万葉集玉の小琴』『万葉集問答』『万葉集東歌僻説評』――以上第六巻――、『万葉古風格』『万葉集疑問』『万葉集問答　補遺』『和歌の浦』――以上十四巻――、『万葉集答問』――別巻一――がある。

（7）「幇間歌人　佐伯赤麻呂」『上代の文学と言語』　昭和四九年一一月　境田教授喜寿記念論文集刊行会

（8）「万葉集における『報』と『和』の問題」『万葉集における中国文学の受容』　二〇〇三年一〇月　塙書房

（9）窪田評釈

（10）「大伴家持――山本健吉・北山茂夫両氏の近著にふれつつ――」『文学』40―9　昭和四七年九月

（11）北山茂夫『大伴家持』昭和四六年九月　平凡社

文中に挙げた注釈書の省略は下記のごとくである。

代精　契沖『万葉代匠記』精撰本　元禄三年刊。童蒙抄　荷田春満・信名『万葉集童蒙抄』天文年間。考　賀茂真淵『万葉考』明和五年刊。略解　橘千蔭『万葉集略解』寛政八年。古義　鹿持雅澄『万葉集古義』天保一〇年。新考　井上通泰『万葉集新考』大正四～昭和三年。口訳　折口信夫『口訳万葉集』大正五～六年。全釈　鴻巣盛広『万葉集全釈』昭和五～一〇年。総釈　藤森朋夫『万葉集総釈』巻八　昭和一〇年。金子評釈　金子元臣『万葉集評釈』巻八　昭和一五年。窪田評釈　窪田空穂『万葉集評釈』巻八　昭和二五年一一月。佐佐木評釈　佐佐木信綱『万葉集評釈』巻八　昭和二五年。訂増全註釈　武田祐吉『増訂万葉集全註釈』五　昭和三二年。私注　土屋文明『万葉集私注』増訂版　巻八　昭和四四年一〇月。大系　『日本古典文学大系　万葉集』二　昭和三四年九月。注釈　沢瀉久孝『万葉集注釈』巻八　昭和三六年一月。全集　『日本古典文学　全集』二　昭和四六年一月。集成　『日本古典集成』二　昭和五三年一一月。全訳注　中西進『万葉集全訳注原文付』（二）　昭和五五年二月。全注　井手至『万葉集全注』巻八　平成五年四月。新編全集　『新編日本古典文学全集万葉集』二　平成七年四月。釈注　伊藤博『万葉集釈注』四　平成八年八月。新大系　『新日本古典文学大系』二　平成一二年一一月。和歌大系　稲岡耕二『和歌文学大系　万葉集』二　平成一四年三月。全歌講義　阿蘇瑞枝『万葉集全歌講義』四　平成二〇年七月。全解　多田一臣『万葉集全解』3　平成二一年七月。